

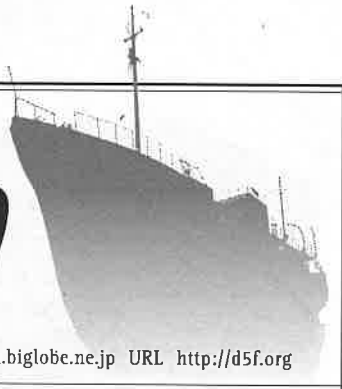
2007.07.01  
No.338

(7・8月合併号)

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

# 福竜丸だより



神戸市太陽の子保育園より届いた「ふくりゆうまるのえ。」「ずーとみまもってあげてくわさい ばくだんはつくったらあかね」の手紙も添えてありました。

## 第五福竜丸パネル展 夏から秋にかけて一九カ所で

第五福竜丸平和協会が二〇〇四年のビキニ事件五〇年を記念して製作し、各地での開催をよびかけている「第五福竜丸展」が今年は一九カ所でおこなわれます。

展示用パネルは、第五福竜丸の被災、被爆マグロ、放射能雨と国民的な原水爆禁止の世論の高まり、第五福竜丸乗組員の闘病と久保山愛吉無線長の死、世界の核実験被害を中心に写真と解説のパネルで、二〇枚組、三六枚組、七〇枚組とマーシャル諸島のヒバクシャの写真パネルからなり、展示の規模に合わせて現物資料も展示できます。

また、昨年の企画展「ベン・シャーンの第五福竜丸」で展示したベン・シャーン作品の絵本「ここが家だ」を額装したパネルの貸し出しもおこなっています。

### 【おもな開催地一覧】

\*7月8日 香川県連合青年団主催「戦争体験を聞く会大

石又七さんのお話しとパネル展」

\*7月24日～8月11日 富山・高岡市主催「平和写真パネル展」

\*7月25日～30日 西宮市主催「原爆展」

\*7月26日～30日 埼玉・平和のための戦争展

\*7月31日～8月15日 愛知・岩倉市主催「第五福竜丸展」

\*8月2日～9日 大阪・吹田市主催「第五福竜丸展」

\*8月2日～6日 焼津・平和のための戦争展

\*8月10日～18日 西東京市・「第五福竜丸展」

\*9月14日～10月15日 広島・福山市主催「第五福竜丸事件をたどるーベン・シャーン作品とビキニ事件展」

\*9月24日、25日 北九州・平和のための戦争展

\*11月27日～12月9日 大阪・箕面市主催「みのお市民人権フォーラム」にて

## 第五福竜丸 船体の現状と保存の展望（下）

日塔和彦

前号につき船体の現状と今後の補修、保存について、木造文化財の専門家・日塔和彦さんにご寄稿いただきました。

### 4、今後の課題①当初腐朽部材の取扱い

一九八六年の保存工事では、夢の島に捨てられた状態を保存するという基本方針に従い、建造物の保存修理では本来なら新材で取り替えるべき腐朽した部材もすべて保存



上甲板・梁補修 上甲板梁の取替え

再用することとした。そのため、第五福竜丸の船体の中に新しい部材を組み込んで補強し、腐朽した部材をそのまま存置してある。この方法は、工事当初の鉄骨支承による補強方針を大きく変更したものであり、その時の方針変更キヤッチフレーズは「古い船の中に伝統工法による新しい木造船を組み込んで保存する」というものであった。

現在の船には膨大な量の古材が保存再利用されている。そのほとんどは、腐朽して木材としての強度を持っていないばかりか、手で触れるとポロポロと崩れてしまうゴミのようなものである。保存工事では、こうした古材への保存処理として、木材保存剤（クレオソート及びキシラモン・ク



船尾部補修 船鰐の取付け作業

リアー）を吹き付けて殺菌と防腐処理を行なった。木材の保存に適した湿度や気温が保たれば、法隆寺ほどではないにしてもかなり長期間の寿命が期待できる。

しかし、現実には展示館の温湿度変化や地震による振動、人為的な振動（歩行）や接触、空気の振動などが原因となつて、徐々に腐朽木片の剥離が進行する。九六年現況調査では目視できる隔壁部分に細かい木片の落下が確認できた。10年間の落下量としては多いものではなかったが、長期間では無視できない現象である。肋骨のように目視で

きない部材でも同様な現象が発生しているのは確実である。

文化財保存分野で、このような保存対策を研究している機関に国立の東京文化財研究所がある。ここでは、先端技術を用いた科学的な各種処理法を研究指導していることから、一九九七年修理時に修復技術部の川野邊渉主任研究官に指導を仰いで、腐朽古材の含浸強化処置を試験的に実施した。科学的処理は一度施工すると再施工は困難になるので、慎重な薬剤選定と施工、経過観察が必須となる。

含浸強化処理の試行箇所は魚艙・タンク室間隔壁の魚艙側、学生室・機関室間隔壁の両面、計三箇所である。木材の含浸強化処理剤は一般的にエポキシ樹脂系やアクリル樹脂系が選定されるが、ここでは漆系樹脂が選定された。これは、前者が強固な含浸剤で、福竜丸のように部材全体に腐朽が及んでいる場合は木というよりプラスチックのようになつてしまうことや、内部まで浸透しにくい、処理後の濡色・光沢が強いなどの欠点がある。

ある。これに対し、採用した油性合成漆（ポリサイト）は、植物性であることから表面に光沢が残りにくく、内部まで浸透し、固くなりすぎないという利点を持つている。現在、やや黒ずんで、光沢が少し残っているが、処理後の木片剥離はみられない。希釈剤の量を加減することで、もつと良好な施工も可能である。

現在、露出している古材への含浸強化処理は予算の都合がつけば、いつでも施工が可能である。しかし、肋骨や外板内側のように露出しておらず隠れている部材は、取り付けた新材を剥がさないと施工できない。この新材は、船の構造を補強している部材でもあることから、安易に取り外すことはできないものである。また、取り外し作業により腐朽古材がさらに破損することにもなり、この部分への含浸強化処理は非常に困難性を伴っているといわざるを得ない。

今後の保存を考えたとき、可能な限り船の環境を整えてさらなる腐朽を抑えることが（3めんにつづく）



海の博物館の収蔵庫「舟の棟」。独特のドーム型の建物で木造船多数を収納。湿気をもたせるため床面は、土である。海の博物館の設計は内藤廣氏で日本建築学芸賞を受賞。収蔵資料は55,000点で6,800点余が国指定の重要有形文化財。撮影・小林浩志

(2めんよりつづく)

最も重要であることが、改めて認識される。

5、今後の課題②展示館の問題

展示館内部の環境が今後の第五福竜丸船体保存のポイントとなることは、これまでに見てきたとおりである。現在の展示館は、設計を公募して採用されたデザインの優れた建物であるが、その設計評価に当たっては、古い木造船を

保存するための施設であるとの視点が欠落したとみなさざるを得ない。

三重県鳥羽市に「海の博物館」があり、ここには多数の木造船が保存展示されている。収蔵物には多数の重要な民俗文化財を含むことから複数ある展示館は、主体を木造とし屋根は瓦葺きとした和風な造りとなっている。展示館内部は日光を直接に入れず、人工照明に頼っているた

めに薄暗く、やや湿度が高い。これは木造品の保存には日光(紫外線)の遮断が重要で且つ一定の適正湿度を保つための工夫がなされているためである。空調設備はなく、代わって土間床がある。この自然に呼吸して湿度を保つ土間床が木造船にとって保存に適した環境を作り出している。

第五福竜丸展示館は、残念ながら海の博物館のような木造船の保存に適切な配慮がなされていない。その構造から、むしろ逆に紫外線を多く取り込み、夏冬、昼夜の温湿度変動が大きく生じて強力な空調が必要となっている。その結果、展示館収納まもなく船体の木部の腐朽や鉄部の錆の発生が進行し、収納10年目には根本修理が必要となっている。

一九九六年現況調査の報告書において、船体保存の環境に関する提言を行なっている。この中で、館内の温湿度データを長期間取ること、トップライト・妻面からの紫外線をカットすること、屋根面からの輻射熱を断ち切って吹き出し式暖房を止め、対流に



展示館内。写真右の鉄骨の柱をおおう壁は途中までしかない

よる暖房に切り替えることなどを提案した。その結果、温湿度データの採取、妻面からの紫外線カット工事、屋根裏面への断熱材補修、トップライト閉鎖工事が翌年実施された。

しかし、これでもまだ古い木造船の保存施設としては適切ではない。思い切って展示館を建替えて、保存を目的とする施設にするのが最適であるが、建設後30年目ではそうもいかない。現実的なのが、屋根の下弦フレームに沿って新しい天井を張り、屋根鉄板と天井板との間に空気層の断熱層を設けることであろう。この約90cmの空気層は、夏に熱風となつて自然に上方に排出され、冬の冷たい外気は断熱

効果で遮断してくれる。

工事費はかなり高くつくものの改築費用とは比較にならない程安価であり、船体を将来に繋げるための現実的な改造法であろう。

(東京芸術大学客員教授、第五福竜丸平和協会評議員)

特別展「船大工の技と仕事」  
トークイベントへぜひご参加ください

\*七月一六日(月・祝)午後2時~4時(終了後、茶話会あり)

\*第五福竜丸展示館内

\*お話し 日塔和彦さん(東京芸術大学客員教授)、近藤友一郎さん(焼津在住、船大工棟梁、現代の名工)

# 緑のちゃんちゃんこを着た 第五福竜丸

徳田純宏

『熊野からの手紙―熊野で造られた第五福竜丸の記録』の著者、徳田純宏さんよりご寄稿いただきました。

二六年前、朝日新聞和歌山版で「喜の国見聞録」という連載をした。紀州の民俗や風習、文化を紹介するルポルタージュである。その中で、南藤藤夫さんという一人の船大工に出会った。和歌山県古座で木造船を造っていた。

「そこで、地元の熊野水軍と船とのかかわりなどの話で盛り上がりを見せ、さて帰ろうとしたときであった。「なあ、あの被爆した船を知ってるかいな」と南藤さんが言った。ひとり言のように聞こえた私は、黙っていると「そうか、それならええわ」と、くると背をむけた。その背中には、寂しさのようなものが滲んでいた。



進水間近の第七事代丸

わが子を生むような気持ちで造った第五福竜丸（進水時は第七事代丸）が、被爆してしまつた悲しみを、南藤さんは胸のうちに抱えていた。だが誰にも打ち明けられなかった。その気持ちを誰かに喋り、暗い心から開放されたいと思ひ続けてきていたのである。「あの被爆した船・・・」と私に喋りかけた時は、（なあ聞いてくれよ）と祈るような気持ちだったに違いない。

なのに、私はそのことに気づかなかつた。あまりにも唐突すぎ、衝撃的すぎたからである。

（この人は、とんでもない重い荷物を背負っている）と感じたのは、それから数週間ほど経った暗い雨降りの日。雨音に急かされるようにして、再び南藤さんを訪ねた。

トタン屋根にひびく雨音のなかで、第五福竜丸の誕生秘話を聞いたのだが、被爆という結末を持っているだけに、雰囲気は暗いものであった。

「希望に胸をふくらませて造つた船が、あんなことになつても悲しいけども、でも平和を問う船として第五福竜丸展示館に置いてもろてるのが、嬉しいねえ」と、やつと話に明るさがみえはじめたのはかなりの時間が経つてから。あまり喜怒哀楽を表にだすことをしなかつた棟梁の目に、うつすらと涙が浮かんでいた。

その南藤さんとの出会いが、「私と第五福竜丸」との出会いとなつた。

もう十年以上も前になるだろうか、私が展示館を訪れた

とき、学芸員の方に無理をいって第五福竜丸の甲板に立たせてもらい、そして操舵室から船底に潜らせてもらったことがある。

なぜそんなことをしたかというところ、南藤さんが全身全霊をかたむけて造つた船を、内側から触れてみたかつたからである。ひよっとして、そこに、船大工の魂をみることもができるかもしれないという思いもあつた。

船底に下りると、あらわになつた肋骨が見えた。角材で補強されているところもあるが、船のなかの空間はしっかりと守られていた。船材の一本一本のなかを血が通っているような不思議な気持ちになつた。なにか、生き物の腹部に入り込んだような錯覚に襲われた。はたと私は思った。南藤さんは船という生き物を造つたんだ、と。

あの時にみせた南藤さんの涙は、血のかよつた生き物として、後世に生き生きと語り継がれる喜びであつたのだと改めて思った。

その第五福竜丸が、今年還暦を迎えた。一九四七年に和

歌山県古座で進水してから六〇年になる。

還暦といえは、四五年生まれの私は二年前に迎えた。風習どおりに、赤い頭巾に赤いちゃんちゃんこを着せられた。元の干支に帰つてきた祝いとということらしいが、決して嬉しくはない。余命のことを考えてしまうからである。

だが第五福竜丸が迎えた「還暦」は違う。みんなに支えられ、平和を問う船として展示館のなかで、ずっと生き続けてゆくだろうから。これは喜ばしいことである。

そんな船に逢いたくて、今年四月二六日に展示館を訪れた。船の「内臓」にもぐり込んだあの日から比べると、館がある夢の島あたりの緑が、一層濃くなっているのに驚いた。森がすくすくと育っているのである。

展示館がやさしい木々に包まれているのを見て、「緑の帽子に、緑のちゃんちゃんこを着ている」と、私は嬉しくなつた。平和な地球であつてほしい、と願う気持ちに相応しい緑だなあと思った。

（放送作家・和歌山市在住）



## 被爆の実相と被爆者の心情に迫る

伊藤明彦著「夏のことば  
ヒロシマ ナガサキ れくいえむ」

岩垂 弘

「冬は鉄礎(かなしき)を打って又叫ぶ、一生を棒にふって人生に関与せよ」と  
本書の冒頭に掲げられた高村光太郎の詩だ。  
このことに象徴されるように、本書は、原爆被爆者の「声」を伝えるために「一生を棒にふった」一人の人間の手による自費出版の著作である。

「一生を棒にふった」人は、伊藤明彦氏。録音機をかついで被爆者を訪ね、被爆体験をききとり、それを収めたテープやCDを全国の図書館や平和資料館などに寄贈しつづけてきたジャーナリストとして知られている。そうした活動を始めたいきさつ、活動の中で出合った困難、そして、活動を通して知った被爆の実相と被爆者の心情を伊藤氏自ら書きつづつたのが本書だ。

伊藤氏がこうした作業を始めたのは一九六八年。在職していた長崎放送で、ラジオ番組「被爆を語る」を担当したからだ。これは伊藤氏が企画・提案した番組で、自身が長崎育ち、原爆投下十日後に入市被爆したという経験の持ち主だったことから、被爆者の声を広く伝え、長く保存するための番組を強く望み、実現にこぎつけた。

ところが、やがて同放送を、さらにその後の転職先も辞める。被爆者の声の録音作業に専念するためだ。その時間を生み出すために定職につかず、早朝・深夜のパート労働に断続的に従事して生活のた

めの糧をかせいだ。

八年間にわたる作業で声を収録・収集できた被爆者は一〇〇三人。広島、長崎での被爆者のほか、ビキニ水爆実験の被災者一九人も含まれる。伊藤氏はその後、これら被爆者の声を、まずオープン・リールに、次いでカセット・テープ、さらにCDに編集し、それを寄贈してきたわけである。

伊藤氏のこうした類例のない活動によって、私たちは原爆を落とされた人たちの体験を、じかにでないものの、それに近い形のナマの声で聴くことができる。高齢化により被爆者が減りつつあり、今後、さらにこの傾向が顕著になることを考えると、伊藤氏の手によって残された被爆者の「声」は被爆の実相を知る上で、実に貴重な手がかりとなるにちがいない。いわば、人類にとつてかけがえのない「遺産」といえる。

本書では、自らも被爆しながらも、献身的に被爆者の救護にあたった医師の証言も収められている。「被爆したヒポクラテスの弟子たち」がそ

れだ。

この中で、広島通信病院勤務の医師だった鼻岡寿男さんは伊藤氏に語っている。「こんなみじめな状態が、人道的に許されるんじゃないかと、治療しながらつくづく考えましたねえ。なんともいえない患者を診まして、気の毒な若い人が、亡くなっていくのをねえ、忍びられんですねえ。じつさい、ええ。許せない、ということですねえ。ぜったい許せんですなあ」「原爆いようなもの、人間をゼロにするんですからねえ。もう、どういうても、その、いけませんなあ」。原爆被爆というものがどういふものであつたかが、この一言に表現されているのではないか。

「被爆都市」三次市の記録——田園都市のなかのヒロシマ——も貴重な記録だ。広島市から六二キロ離れた三次市に住む被爆者を訪ねて、被爆体験を聞いた記録で、いまさらながら被爆直後の悲惨な状況に胸を突かれる。

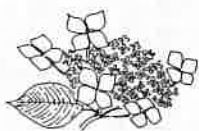
著書名の「夏のことば」とは、被爆者の語る言葉と理解したい。なぜなら、被爆者は

広島でも長崎でも、耐え難い夏の酷暑の中で原爆の閃光を浴びたのだから。改めて、原爆被害にあった人たちの「ことば」に耳を傾けたい。(ジャーナリスト、第五福竜丸平和協会評議員)

◇CD「ヒロシマナガサキ被爆者組織をはじめ一〇〇団体、原爆資料館など九一施設、個人三五六人に寄贈されています。

◇CD九巻からなら「ヒロシマ・ナガサキ私たちは忘れたい」は、ホームページにて音声聞くことができます。「被爆者の声」でネット検索してください。

◇本書「夏のことば」ヒロシマナガサキれくいえむへの問合せは、文藝春秋企画出版部、電話03・3265・1211(代)担当・小林昇さんまで。



# 韓国の被爆者の話をきいて

安田和也



韓国被爆者との交流分科会

五月下旬に韓国のソウルとハプチョンに行く機会を得て、第五福竜丸・ビキニ事件について報告し、また韓国の被爆者から話を聞きました。

今回の韓国行きは、3・1ビキニデーの集会に参加した韓国のNGOピース・メーカーの金承国（キム・スングク）さんが展示館を訪れ、「韓国市民は、広島・長崎以後の核開発被害、第五福竜丸被災についてほとんど知らない」で、そのことを伝えてほしい」との要請があり、日朝協会東

京都連の吉田博徳副会長からも、この機会に韓国の被爆者施設を案内するので、お見舞いをし、ビキニ事件について話してはどうか、とのお誘いを受けたからでした。

## 韓国の平和運動など

### 三〇四百人が参加

五月二七日、二八日は、ソウル大学を会場に「反戦・反核・平和東アジア国際会議」が開かれました。韓国では、初めてという「反核」をかけた会議は、同国の平和団体、環境NGO、反基地運動、高麗大学、ソウル大学学生会、宗教者、被爆者の会などによる実行委員会が開催しました。日本からは一二〇人（原水禁、原水協、被爆者など）が参加しました。

国際会議の開会総会は、ソウル大学のマルチメディア講堂で開かれ、会場ロビーには、韓国の反基地運動の写真パネル、広島・長崎の被爆写真と第五福竜丸・ビキニ事件のバ

ネルが展示されました。

報告のおもなテーマは、「東アジアの非核化」「米軍再編と日本、韓国」「北朝鮮の核保有問題と平和構築」「北東アジア非核化と高レベル放射性廃棄物処分場問題」などでした。

私は、午後のセッションで発言の機会を得て「第五福竜丸展示館と核開発による被害」について話しました。

## 韓国の被爆者の話を聞く

会議二日目の午前には、分科会が七会場でおこなわれ、私は「被爆者との連帯」に参加、日本の被爆者も発言しました。

韓国からは、被爆者協会の元会長の郭貴勲（カク・クイフン）さんをはじめ五人の被爆者がそれぞれの体験と苦しみを語りました。その訴えは、広島・長崎から必死のおもいで帰国したもの、原爆被害への無理解と差別にさらされつづけてきたこと、日本政府の被爆者補償の遅れ、また日本の被爆者との格差など全般におよんで、それぞれの方（恨）が籠もっているよう

した。

## 被爆者の施設を訪問

二九日、ソウル駅よりKT X（新幹線）で南部のテグ経由でハプチョンまで約四時間、当地にある被爆者福祉会館を訪問しました。

ここは韓国でただ一箇所の被爆者施設で、八〇人の被爆者が暮らしています。寝たきりの方も二割ほどいるそうで、韓国被爆者協会の元役員で世話役の柳永秀（ユ・ヨンス）さんの案内で見舞いと談話室での懇談を行ないました。

かなりの方が日本語で、広島や長崎から引揚げてこられた苦労話をされました。私は、戦後の核開発で世界中に被爆の被害があり、第五福竜丸の被害も大きな広がりがあることなどを説明。柳さんは、北朝鮮との友好のためにも韓半島に核のない状態が必要だと話されていました。

## 被爆者の要望と実情

先に紹介した郭さんの報告では、広島・長崎で被爆した韓国人は七万人余、死亡者は四万人で、七〇〇〇人は日本に残り、二万三〇〇〇人が帰

国したが、こんにちまで、苦勞の末にその九割が亡くなっています。

韓国の被爆者二七〇〇人のうち二四〇人は被爆者健康手帳が取得できません。また日本政府は、医療費補助を一三万円を上限に支給していますが、韓国は治療費が極めて高く、また被爆者治療に精通する医者がいないので、日本で治療を受けることを希望しています。日本の被爆者との格差は正と、手帳取得など渡日しないで受給できるような改善を望んでいるとのことでした。

また、北朝鮮の被爆者団体が公表するところでは、被爆者数は九一二二人、広島が七六七人、長崎が一四五人で、手帳取得者は一人だけとのことでした。

郭さんは、被爆者だけでなく戦争の被害者個人に対してきちんと政府が責任を果たして欲しい、日本が核を保有することを韓国民は危惧しており、非核平和の建設にも両国市民が力を合わせたいと強調したのがとても印象的でした。（協会事務局長）

# 田中里子さんを偲ぶ

第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎

田中里子さんは原水爆禁止運動の中で生まれ、原水爆禁止運動の中で生涯を閉じた、すぐれた女性指導者であった。

第一回原水爆禁止世界大会

(一九五五)では議長を務められた地婦連会長山高しげりさんを事務局員として支え、また、第五福竜丸保存委員会の発足(一九六九)の際も地婦連事務局長として保存委員山高しげりさんと一体で参画された。

財団法人第五福竜丸平和協会との関係では、田中里子さんは二〇〇二年三月より評議員に就任された。田中さんの訃報に接したのは、本年三月の定例理事会で次期の評議員への再任が決定された直後であった。

田中さんの評議員在任中は、第五福竜丸水爆被災50周年を迎え、財団としても数年間に及ぶ記念プロジェクトを立ち上げた時期であった。

東京地婦連・緑の銀行による「八重紅大島桜」の展示館前庭への記念植樹、二〇〇四年にはビキニ被災事件50周年に当たりご寄附を賜った。



地婦連・山高しげり会長と田中里子さん、1957年ごろ

第五福竜丸展示館開館30周年記念の座談会(二〇〇六年一月)では「第五福竜丸のエンジンを夢の島への都民運動」についていきいきと報告された。

私が個人的に田中さんとお近くで一緒に仕事をさせていたのは一九七七年のNGO被爆問題シンポジウムをなさむ三年間だった。

私は事務局長として、シンポジウムの科学的内容を準備、作り上げていくことに集中していたが、同時にシンポジウムを国民的支持のもとに成功させていくためには、準備の進行に応じた各節目々々で諸団体の理解と協力を得ながら進めていかなければならぬ。

日本準備委員会や推進団体会議では田中さんが諸会議への出席がもつともよく、流れをいちばん正確にフォローされていたように思う。

翌七八年の国連軍縮特別総会で田中里子さんは、6月12日、NGOデーで、日本のNGOを代表し被爆問題国際シンポジウムの成果を踏まえ、たすばらしい演説をされた。

## 尼崎の保育園で 劇「船ものがたり」

今年初め、兵庫県尼崎市・太陽の子保育園の本間恵利子先生が来館され、園児たちからの折鶴が寄贈されました。

一生懸命さが伝わってくる千羽鶴には「すいばくはんたい銀河組」と書かれています。「とびうおのぼうやはびようきです」をみんなで読んでのこと。先生はじっくりと見学され、本やDVDをたくさん購入されました。第五福竜丸をテーマにした「劇」を考えているとのことでした。

真を見て「サダコちゃんといっしょや」と気づきました。また絵本『わすれないで』や『ここが家だーベン・シャーン』の第五福竜丸との出会いも、劇の構想へとつながっていききました。

先生が展示館で撮った写真を見て子どもたちは「ほんまのたいりょうばた?」「そんなににおきいん?」と質問せぬ。マグロ漁の映像や映画『第五福竜丸』なども観て、思いを深めていきました。

二月、東京デイズニールンドへ行くまなみちゃんに託されたみんなからの絵手紙が届けられ、三月の卒園と成長を祝う会で披露された銀河組の劇『船ものがたり』の録画も送られてきました。

「せんそうはあかん」「こわいばくだんをつくつたらあかん」という気持ちと、平和を守ろうとしている人たちへの思いが、しっかりとこめられていました。みんなが手をつないで歌った「世界中のひとが平和を願えば、どんなにやさしい地球だらな」の歌詞がいつまでも心に残る素晴らしい劇でした。

## 中学三年生からの手紙

◇「僕は笑うときは思いっきり笑います。笑うことは大好きです。人の笑顔も大好きです。悲しい顔はキライです。だから原水爆は製造しない。そして世界中を笑顔でいっぱいになりたい。このような大切なことを気づかせていただき本当にありがとうございます」山形県山辺町の悠也君は便箋にびっしりと感想を書いてくれました。

◇第五福竜丸の被災と放射能の恐ろしさを知って「久保山さんをはじめとする漁師のみなさんに感謝したい」と感じた会津若松市の紗季さん。「前より原水爆は存在してはいけないものだと思います」と同級の紗也佳さん。

◇ガイド・ボランティアから「どうして核や核実験はなくなるのか、あなたたちでしっかり考えてください」と呼びかけられ「答えを聞くばかりではなく、自分達でも考えて答えを見つけなければ核はなくなることに気づきました。この事件の意味を考え、被爆者の“核のない平和な世界になってほしい”という気持ちを無駄にしないように、私たちでできることを考えていきたいと思います」と力強く書いてくれた三重県津市の和泉さん。「自分にも関係があり、真剣に考えていかなければいけないんだ」と実感した夏紀さん。

◇送られてくる感想文を前に、ガイドに当たったボランティアスタッフ一同感激しています。「私がおばあさんになってもずっと、第五福竜丸がのこっていることを願います」という山梨県の6年生の言葉に、これからも船を守っていかなくてはと、あらためて背すじがのびる思いです。

(文・ボランティアの会 M.I)

## 平和行脚など 展示館前から出発



6月16日、日本山妙法寺の平和行脚が、展示館から出発しました。出発にさいし、「非暴力、戦力不保持を謳った日本国憲法9条の心と、核兵器のない世界にしていくことを誓い、8月の広島へむけて歩きます」と挨拶され、うちわ太鼓を打ち鳴らしながら船体の周りを歩き、久保山碑とエンジンに合掌して広島へ向かいました。

また今年で19回目を迎える「反核火のリレー」(日本青年学生平和友好祭東京実行委員会)は、5月28日に展示館・エンジンの前で出発の集いをひらき、在日米軍横田基地(福生市)に向けてスターとしました。

## 大石又七さん 『これだけは伝えておきたい 第五福竜丸の表と裏』出版



第五福竜丸元乗組員大石又七さんが、三冊目の著作となる『第五福竜丸の表と裏』をかもがわ出版より7月はじめに上梓しました。

新著は、若い世代にも手にとってほしいと写真も多数収録、被災50年以降に入手した資料なども取り入れてあります。販価1575円。ぜひ周りの方にもお勧めください。また地域の図書館へもリクエストをお願いします。

## ちひろ美術館(東京)で ベン・シャーンの 第五福竜丸作品展示

ちひろ美術館開館30周年を記念にして開催される特別展「世界中の子どもみんなに平和としあわせを」(7月4日～9月2日)で「ここが家だ——ベン・シャーンの第五福竜丸」展が開催され、協会所蔵の素描7点も展示されます。この展覧会は、「ちひろが願ったこと」—戦争の絵本や日本国憲法の本に編まれた作品、「ベトナムの子どもを支援する会」反戦野外展の3部で構成されています。

## ボランティアの 会総会開かれる

春の修学旅行シーズンも一段落し、新しいメンバーも迎えた6月10日、第五福竜丸ボランティアの会総会が開かれ、この間の取り組みや秋の特別展などについて意見交換しました。その後、夢の島公園内のスポーツ文化館・Bumbで懇親会がもたれ、発足7年となったボランティアの会メンバーに、協会の川崎昭一郎会長より感謝状が手渡されました。山村茂雄理事も出席しました。

## ホームページを リニューアル

6月より協会ホームページの一部をリニューアルしました。展示館でのイベント案内に加え、近況報告のコンテンツも設け、日々のできごとなどをお知らせします。ぜひご一読を。

<http://d5g.org>